

# The reason for evolution

フィンランドの家が  
日本で進化した理由

## 【ランタサルミの秘密】

フィンランド生まれの「ランタサルミ」が日本で進化したのはなぜか？  
「ランタサルミ」をプロデュースする(株)ゲストハウスの代表取締役・上田淳氏にその理由と、これからのログハウスの可能性について尋ねた。



長野県軽井沢町に建つランタサルミのモデルハウス。軽井沢の自然に調和し、そこでの暮らしをイメージしたデザインを採用している。ゲストハウスの軽井沢のアトリエでもあり、ここから最新のデザインが発信されている。



# reason 1

## 日本人の豊かな暮らしの ステージを創るために。

### 東

京都千代田区に本社を構える株式会社ゲストハウス。同社の代表をつとめる上田淳氏は、日本国内でマシンカットログの可能性を広げてきた先駆者の一人だ。

マシンカットログとは、機械で加工したログ材を使ったログハウスのこと。精密さや品質の安定性に加え、見た目もスマート。無垢の木に囲まれ、デザイン性の高い住まいを実現できる。

ゲストハウスが手掛けるマシンカットログブランド「ランタサルミ」。その最大の魅力は、「自由度の高さ」にある。日本オリジナルデザインに基づき、ログハウス部材等も好みで選択できる独自のオーダーシステムを構築。これにより、家族構成や建築地の周辺環境、理想とする暮らしのイメージなど、住む方の要望がきめ細かく反映された柔軟性の高い家づくりが可能となっている。

マシンカットログの根幹を担うログ材は、フィンランド南東部の町・ランタサルミから同社が直接輸入。建物の性能を大きく左右する建具が

### UEDA ATSUSHI



(株)ゲストハウス 代表取締役。一級建築士。北海道旭川市出身。千葉工業大学建築学科卒業。87年一級建築士事務所として独立。海外で出会った木造建築の豊かなデザイン性に魅かれ、以降各種プロジェクトや住宅メーカーのモデルプラン開発などを通じて日本におけるログハウスの普及に努める。04年よりフィンランドログハウス「ランタサルミ」日本総代理店。10年以降は自社ブランドとして独立。北欧スタイルをベースとした、これからの日本の暮らしへ向けた新たなデザイン・構法の開発に取り組んでいる。

ら小さな金具にいたるまで細かくテストを行い、これをクリアしたものが、日本オリジナル仕様として採用される。こうした厳しい品質管理によって、日本の環境で快適に暮らすことができる住まいを実現させているのだ。

ゲストハウスが目指すもの。それは「人がくつろぐことができるデザイン」だ。はつきりとした四季のある日本の気候において1年を通して心地よく、くつろいで暮らせる家。しかも様々なライフスタイルにも応える、懐の深さをもったデザイン。「日本の暮らしを豊かにする本物の家、長く快適に暮らすことができる住まいを提供したい」。そんな上田

氏の想いが、日本向けに開発した部材による、自由設計のログハウスという答えに行き着く。  
日本のハウスメーカーでは、いまだにモデルプランの中から家づくりを進めていくケースが大半だ。ただ、日本人のライフスタイルや志向は、昔と比べてはるかに多様化している。それでも、いまだに6畳、8畳といった枠組みの中での家づくりが主流なのはなぜか。それは、既成のサイズを組み合わせた方が、メーカーは効率よく家づくりを進められるからだ。

一方、ゲストハウスでは、住む人に必要な空間を、既成の概念に縛られることなく自由にデザインしていく。そこで暮らす家族が主体となり、豊かな生活を育む住まいづくり。それを叶えてくれるのがゲストハウスが手掛ける「ランタサルミ」なのだ。ランタサルミは、ログハウス建築コンテストで数多く賞を獲得している。その豊富な受賞歴からも、ゲストハウスの家づくりに対する姿勢や想いが高い評価を受けているのが分かる。

## これからの暮らしのための住まい



(上)パイン材や珪藻土、天然石タイルなど、室内を好みに合わせて仕上げることもランタシードの魅力。  
(下)2008年に完成したランタシードのプロトタイプ住宅。



**近** 年、欧米に比べて遅れがちだった日本の住宅の省エネルギー政策が進んでいる。地球温暖化防止のため、CO<sub>2</sub>の排出量を抑えた住宅へと転換を促す政策だ。11年の東日本大震災以降急速に進展し、20年以降の新築住宅には省エネルギー性能が義務化される予定。地域ごとに断熱仕様の基準を設け、家全体の消費エネルギー量が制限されるようになる。もともと自然素材を使用し、環境に優しい住宅であったランタサルミのログハウス。その魅力に、さらに省エネルギー性能を高めたのが「北欧デザインをベースに環境にやさしく、エネルギー消費を抑えて豊かに暮らす」がコンセプトの「ランタシード」だ。

「ランタシード」の第1号は、早ければ今夏にも誕生する。「これからの展開が楽しみです」と笑顔が浮かべる上田氏。その笑みの向こうに、日本のログハウス文化のさらなる可能性を垣間見た気がした。

「今の基準をクリアするだけではなく、それ以上につと長く、快適に住み続けていける家を目標にしています」と上田氏。

部材の選択も幅広く、好みのスタイルや費用などの条件に応じたカスタマイズが実現できる。「ランタシード」の本格的な展開の中には大空間が実現できる大断面木造ラーメン構造のように、より自由な構造を実現できる新たなシステムの構築もフィンランドのメーカーと共同で開発中だという。

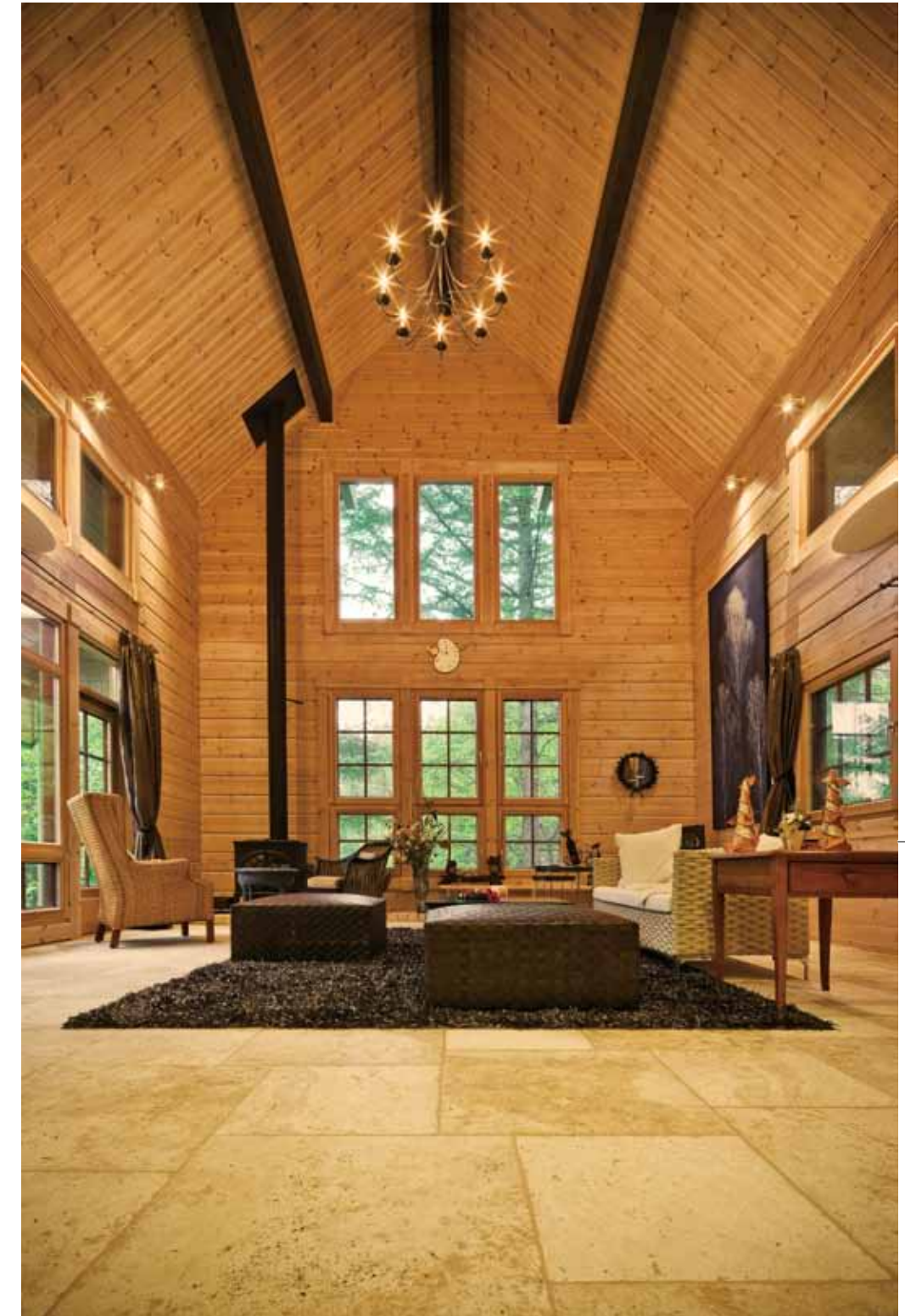
**住** まいを設計する上で、ゲストハウスがこだわるのは、「住む人の生活をイメージすること」だという。

「例えば、お客様から『20畳のリビングが欲しい』という要望をいただいた時には、なぜそうしたのかを考えることが大切です。その要望には『そこでどういう気分になりた

いか』という願いが隠れているはず。これを理解した上で、「本当に必要な空間は何だろう」と考えるのが私たちの仕事です」と上田氏は語る。「私たちは単なる器を作るわけではない。空間を創造するのが使命です。そこでどのように生活が営まれ、幸せを感じていただけるかが重要なことです。私たちの提案によっ

て、その方に新しい暮らしのイメージを発見していただくことが何よりの喜びです。そして、これからも豊かな暮らしのシーンを演出するお手伝いをしていきたいと思っています」。

末永く快適に住め、いつまでも満足していただける家を目指して。ゲストハウスは、そんな理想の家づくりを今後も追求し続けていく。



reason **2** 大切なのは、一人ひとりの暮らしを考えること。